



第122号

平成21年2月1日発行
発行所
長崎大学玉園同窓会
〒850-0029
長崎市八百屋町36番地
☎095-824-5494
発行人
小川大天
(株)昭和堂

教科の特質に応じた学び方を 学び取らせる授業づくり



会長 小川 大天

協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性

③たくましく生きるための健康や体力

平成二十年三月二十八日に学習指導要領が改訂されました。その改訂の趣旨は、「知・徳・体」の調和のとれた「力」即ち「生きる力」の育成ということです。具体的には、

①基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、これらの知識や技能を活用して、自ら考え・判断し・表現することにより、さまざまな問題に積極的に対応し解決する力

②自らを律しつつ、他人と共に

現行の学習指導要領と改訂学習指導要領は、前述のように、「生きる力」の育成という理念においては同じであるといえます。違いは、「ゆとり」ではなく、「①」に示されているような基礎・基本を時間をかけて確実に習得させ、これを活用できるようにしてやるこ

とといえます。そこで、教科の特質に応じた学び方を学び取らせる授業づくり、として、次のことを提案してみました。それは、「基礎・基本を確実に習得させる過程において、それぞれの『教科等の特質に応じた学び方』を学び取らせる。」ということとです。

中学校「数学」について見ると目標に「数学的活動を通して、数量や図形などに関する基礎的な概念や原理・法則についての理解を深め、数学的な表現や処理の仕方を習得し、…」とあります。例えば、一年の「数と式」の所では「等式の性質を基にして、方程式が解けることを知ること」とあります。等式には「等式の両辺に同じ数を加えても、両辺から同じ数を引いても、等式は成り立つ」という性質があります。第一段階は、この性質を利用して方程式を解きます。

次に、この等式の性質を利用した問題解決的な解法が定着した段階で、下記のような見方ができることに気付かせるとともに、移項という見方・考え方について理解を深めます。

問 次の方程式を解きなさい。

$x - 3 = 8$ $\begin{array}{r} -3 + 3 \text{は} 0 \text{だから、省略することが} \\ \hline x = 8 + 3 \end{array}$	$x - 3 = 8$ <p>左辺を x だけの項にするために、両辺に 3 を加える。</p> $x - 3 + 3 = 8 + 3$ $x = 11$ <p>左辺の -3 の符号を変えて $+3$ として、右辺へ移したと見ることができる。——移項</p>
---	--

次の段階は、移項の考えを使つて方程式を解き、方程式の解法がより単純化できたことに気付かせる。このようなことを通して、数学の学び方を、学ばせていくことができます。

ところで、数学は思考を論理的に進めていき、問題を解決していくことが中心となる。わたしたちは、考えるときは、頭の中で言葉を組み立てて考えています。日頃の正しくきれいな言葉使いは、正しく美しい結論を導きだします。授業づくりでは、このことも大切にしたいと考えています。

主題 「基礎的な知識・技能を 確実に身に付けさせる授業づくり」

ゆとり教育の象徴ともいえる「総合的な学習の時間」は、各教科で身に付けた知識や技能を生活においても生かし、総合的に生きて働くようにすることが求められていました。

しかし十年経過した今日の現実はこの理念が必ずしも生かされているとは言いがたく、とりわけ「基礎的な知識・技能の習得」に問題があるということが、諸調査で明らかにされています。

そこで文部科学省は、中央教育審議会の答申を受けて新学習指導要領を二十年三月二十八日に改訂しました。改訂の趣旨は、①「生きる力」という理念の共有 ②基礎的・基本的な知識・技能の習得 ③思考力・判断力・表現力の育成 ④確かな学力を確立するための時間数の確保 等です。ここでわたしたちが注目すべきことは、子どもの学力の実態、ひいては教師の指導力の在り方をふまえて、改訂の基本方針に「学力の重要な三つの要素を育成します」と表明されていることです。

わたしたち教育に関わる者は、専門家としての確かな力量が問われていると受け止め、「教師は授業で勝負する」姿で応えていかなければならぬと考えます。

各学校では、この十年間の課題を明確にしなが、子どもの実態や地域の特徴をふまえ、新学習指導要領の具現化を目指して取り組んでいるものと思います。

そこで、本号では、「基礎的な知識・技能を確実に身に付けさせる授業づくり」という主題を掲げ、各学校の研究や実践の現状を紹介し合い、研修の場にしたいと考えました。

「ふり返りの時間」の効果的な活用



諫早市立真城小学校 山口 敬博

新学習指導要領の移行期間のスタートが目前に迫っています。その改訂の重要なキーワードの一つである「基礎的な知識・技能の確かな定着」について考える機会を頂きましたので、日々の実践の中で、着実に効果が上がっている取り組みを紹介したいと思います。

その実践とは、授業の最初に必ず「ふり返りの時間」を設定することです。「何だ、そんなこと？」という声が聞こえてきそうですが、これが結構有効なのです。

授業開始の挨拶が終わるとすぐ、子どもたちが挙手して前時の学習内容や学習方法、考え方、感想等思い思いの視点から発表します。出された意見は、「身に付いている力」として黒板の左隅に板書します。時間にして約三、五分程度の取り組みですが、時間に見合うだけの十分な効果があるのです。その効果の一つは、反復によって学習内容が定着することです。前時を思い出し、発言し、板書を見ることで、五感を通して反復さ

れ、内容を忘れてしまう児童の割合が格段に減少しました。宿題(授業のふり返り・感想・生活との関連づけ等)と組み合わせると、さらに効果が上がりました。また、前時を意識させることで、既習事項を本時に活用しようとする意識が高まりました。本時に生かした内容や学習方法、考え方を、さりげなく強調しておくことさらに効果的でした。活用することで、既習事項(本時における基礎)そのものも、より一層強化されてしっかりと身に付きます。

二つ目は、経験や既習のレベルを揃えてあげること、児童が安心して授業に臨むようになることです。普段なかなか発言できない児童も、ふり返り時には自信をもって発言します。そして、クラスみんなの考えを共有できた状態で本時のスタートが切れるのです。その結果、子どもたちは、授業に対して気持ちを楽にして、意欲と興味をもって取り組みます。決して特別な取り組みでもありませんし、誰にでもできる簡単な実践です。しかし、教師が意図し、ねらいを持って仕組む小さな工夫の積み重ねが、実は基礎・基本を確実に身に付けさせる授業につながるのではないかと考えます。

国語科の基礎学力の定着を

松浦市立志佐小学校 黒石 眞喜子



本校は今年度も、国語科における実践研究を行ってきた。

二十一世紀は「知識基盤社会」であるといわれており、国語科においては、実生活・実社会で生きてはたらし各教科等を貫く基礎・基本の力としての国語力の育成が求められている。

本稿では、高学年部会で取り組んだ説明文の「基礎的な知識・技能を確実に身に付けさせる授業づくり」について書いてみたいと思う。表現や叙述に即して正しく読み取る力に課題があるという児童の実態を踏まえて、研究がスタートした。そこで、読み取りに必要な基礎力を身に付けさせるための方策として、わたしたちは読み取り

のための「手がかり」について考えていくことにした。正しく読み取るためには、そこに「手がかり」があることに気付かせたいと考え、「手がかり」を児童に提示できる形でまとめたいことにした。

まずは一人読みの過程で、(一)各形式段落の中心となる言葉や文を探す。(二)接続語や指示語、文末表現に着目する。(三)写真や図など文章を照応する。といった「手がかり」をとらえるための手順を示し、一人ひとりの課題解決の意識を高める。そして、「手がかり」が児童にとっての本当の「手がかり」となるために、①中心となる言葉や文は、題名と関連があったり、繰り返し登場したり、各形式段落の最後にまとめてあったりすることが多いこと。②接続語には一つ一つの働きがあつて、順接・逆接：：で仲間分けができること。③接続語がつなぐ前後の文章のうち、筆者が強調したいのは後の文

章であること。④指示語が指す内容は指示語の前に書かれてあること。⑤文末表現によって、その文に事実が書かれてあるのか、筆者の意見が書かれてあるのか判断できること。などを繰り返し指導(スキル指導)していくことで、読み取りの基礎力を確実に身に付けさせたいと考えた。

一つ一つ確実に

島原市立第一中学校 北浦 縁



成」を主題に、三年間全職員で取り組んだ研究発表会を昨年十一月に終えました。研究の重点課題を授業の工夫・改善と学習環境づくりにおき取り組みましたので紹介します。

各中学校の数学科の教科指導では、習得・活用を意識した取り組みや自校における全国学力・学習状況調査の反省を踏まえた取り組みが盛んに行われていることとされています。このような中、わたしが勤務している中学校では、『確かな学力を育み、自ら学ぶ生徒の育成』を目標として、基礎的な学力を育み、自ら学ぶ生徒の育成

な知識・技能を習得させることを重点目標に決定し、日々の授業を実践することにしました。そこで、各学年、習熟度別少人数指導やTT等の授業形態をとり、質問や発表がしやすい学習環境を作りました。そして復習プリントの活用、学習内容確認テストや計算力テストの実施、問題集の活用等により基礎・基本の習得を確実に図るよう努めました。

その日のうちに復習すると授業で学んだことが自然に身に付いていきます。家庭学習の習慣化を図るために授業ノートの他に宿題帳を準備させています。毎時間の学習を振り返って自己評価の記入と十五分程度でできる復習プリントを貼るためのノートです。授業の最初に解答することで前時の内容が確認でき、生徒たちはやる気をもって授業に臨むようになりました。また、解答はできるだけ生徒自身に説明させるように心がけています。このことがより理解を深め表現力をつけることにつながるのではないかと考えています。

現在は、活用という言葉を意識し、なぜ?どうして?と思いをめ

ぐらし筋道を立てて考察していく楽しさを体得させられるような授業づくりに取り組んでいます。まだまだ研究の途上ですが、今

国語科の授業実践

大村市立大村中学校 田上 左千代



「基礎的な知識・技能を確実に身に付けさせる授業づくり」というテーマにそったものかどうか、いささか不安ではあるが昨年、中学三年生で行った国語科の授業実践について述べさせて頂きたい。

【単元名】 ことばでイメージをひろげよう〜俳句を味わおう〜
(教材名：近代の俳句)

【指導上の留意点】
本単元では、俳句の知識を基に、

作品の概要を知るとともに、一つの言葉に即して膨らませた自

求められている資質を生徒に身に付けさせ「生きる力」を育むよう努めていきたいと考えています。

己のイメージを文章化させる活動

を行わせることとした。その学習の過程においては、季語や切れ字、区切れ等従来の知識(言語事項)をより確かなものにするとともに、自分なりの読みを生かして(読むこと)、言葉を駆使して表現すること(書くこと)により、領域相互の関連を図った指導を行うこととする。

なお、事前に以下の三点に配慮した。

- ①「大意文プリント」を提示し、大意をつかむ過程を簡略化
- ②あらかじめ指導者が作成した随筆の例文を提示
- ③構えることなく、自由な発想を促すために、原稿用紙ではなく、罫紙を使用

【実践を終えて】

基本的な言語事項をおさえて、大意文をもとに、各自で選んだ俳句を文章化(今回は随筆に仕立て直すことにした)の作業に入るや、生徒たちは思いのほか生き生きと書く作業に没頭し、途中、相互批評を取り入れることにより、いっそう意欲的に創作に取り組むようになった。生徒たちは、文章化する過程で、必要に迫られて、意欲的に選んだ俳句を深く読み込むため、俳句についての理解もより深まったように感じる。

また、できあがった作品の一部は、学校文集にも載せて紹介したことで、作者となった生徒たちには大きな自信になったようである。わたし自身、前述のとおり、韻文の授業に対するこれまでの「型」(大意文や表現技法をおさえることに重点を置いた授業)を見直すよいきっかけになった。今後も、表題のような授業づくりに近づけるよう、好奇心を忘れず、研鑽を積んでいきたいと考えている。

「授業力向上」への取り組み

県立西陵高等学校 木原修一



観とした。わたしは、専門の化学以外に数学、日本史、体育実技を参観した。授業展開、発問、板書指示など学ぶ点も多く、先生方にも好評である。今後も工夫しながら継続していきたい。

次に「授業評価」を紹介する。アンケート方式で、「課題は提出期日を守っている」など生徒自身の評価、そして「説明はわかりやすいか」など生徒による授業評価を行う。これは、授業を改善する参考材料のひとつとして重要だと考えている。さらに結果を教科や学年で分析して指導に活かすことも大切である。

最後に「中学校との連携」を紹介する。数学科が取り組んで数年となる。互いに授業を参観、あるいは授業を行う。お互いの生徒の実態を肌で感じる良い機会である。今年度は理科でも試みた。日程の調整が難しいが、他教科も実施できれば、さらに意義深いものになると考えている。

個々の教師は、徹底して教材研究と指導法の研究を行うのは勿論であるが、組織的に「授業力向上」の研究を推進する必要性を感じる生徒たちに「確かな学力」をつけるためにも…。

基礎・基本の指導

平戸市立山田小学校 中山和成



教職に就いて八年目。大村市内の学校に六年間勤めた後、昨年度から平戸市立山田小学校にお世話になっております。まだまだ未熟なわたしですが、今までに実践したことについて書かせていただきます。

わたしは、新出漢字の学習を毎週月曜日に指導することにして、一週間で一単元分というペースで学習を進めています。授業の進捗と関係なく指導するため、学期の半ばで新出漢字の学習が終了し、残りの時間を習熟に使えることがよい点だと思います。

また、曜日ごとに「読み仮名テスト」や「小テスト」を実施したり、教室のドアに貼り付けた漢字カードを読んで教室に入ることをさせたりして、漢字にふれる環境作りも行っています。漢字は知っているも練習した単語以外の漢字が書けないことに課題が残ります。今後は語彙力を高めるといふ視点で工夫していきたいと考えています。

山田小では、始業前の活動として音読などに取り組み「かがやきタイム」という時間を週に一度設定しています。ここでは、主に音読集を活用し、早口言葉や言葉遊び、詩、落語など子どもたちが親しみやすい作品を用いて音読活動を実施しています。音読指導をとおして、はつきりした発音や正しい言葉で話すことを身に付けさせることがねらいです。

算数の学習では、練習問題に取り組むことが習熟に大きく関わってくると思います。計算の基礎である四則を正確に早くできる力を身に付けさせたいと、わたしがよく取り組ませているのが、「百ます計算」や「エレベーター計算」です。百ます計算は、子どもたちは自分の最高タイムを目標としてとても熱心に取り組みます。繰り返し練習することで、タイムが半分以下になった子どももいました。

昔から言われる「読み・書き・そろばん」になぞらえ、まとめてみました。今まで、いろいろな先生方と出会い、教えていただいたことがわたしの教員としての糧となっていて、これを改めて感じました。授業で勝負し、子どもたちに生きる糧を与えられる教師となれるように、今後も頑張っていきたいと思います。

高等学校学習指導要領改訂案が昨年末に公表された。改正教育基本法では「生きる力」を支える「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の調和を重視するとともに、学力の重要な要素は、「①基礎的・基本的な知識・技能の習得」、「②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力の育成」、「③学習意欲」であることを示している。さらに義務教育と高等学校との系統性を重視した円滑な接続を図ることを求めている。教育現場に立つ身として、「授業力向上」が重要課題のひとつと考える。本校での取り組みを紹介する。

はじめに、四年目を迎えた「公開授業」について紹介したい。お互い気軽に授業を見せ合い、参観者は所感等を用紙に記入し授業者に渡す。今年度は六月と十一月にそれぞれ二週間設定し、専門教科と専門以外を二回ずつ計四回の参

わたしの教育実践

「キラリノート活動」の実践

長崎市立土井首小学校 江下友香



教職に就いてからの五年間、わたしは、認め合い、励まし合いの雰囲気溢れる温かな学級づくり日々励んでいる。

その目指す学級づくりのために「キラリノート活動」を考え、続けてきた。それは、次のような活動である。

児童に一冊自分専用のノートを作り、一日の初めにノートを回す。回ってきたノートの持ち主の一日を観察し、見つけた良いところをそのノートに書き込んで誉め、持ち主に伝える活動である。

この活動を始めたきっかけは、それまでに築き上げられてしまった固定観念により人のよさを見ようとせず、誤った見方で決めつけて接するような態度が子どもから感じられたことだった。そのような状態をなんとか改善したいと考え、この活動を始めるに至った。活動を始めるにあたり、人の短

所をけなしたり責めたりするよりも、一人ひとりにあるキラリと光るよさを見つけ、認め、誉めてあげられるような美しい心をもつ人になつてほしいというわたしの願いを伝えた。

最初の方はどんなことを書いていいのかわ戸惑うようなところも見られた。しかし、回数を重ねる度に今まではあまり脚光を浴びていなかった自分の頑張りや友だちが誉めてくれることに喜びを感じるようになっていった。すると、自分も友達のよさをより積極的に見つけ、伝えたいという気持ちが生えてきた。

また、ノートは誰もが自由に書くことができるので、一人ひとりのよさを学級全体で共有し、好ましい友だち関係を築けるようになっていった。

自分の一言で友だちが笑顔になって嬉しうと心から喜ぶ子どもの顔は本当に輝いており、その顔を見て私自身も温かな気持ちになり、この活動を始めてよかったと思っている。

これからも、子どもに寄り添って心を通い合わせることで教師になれるように、実態にあった取り組みを考え、日々研鑽を続けていきたい。

共に喜び、共に伸びて行く教師

佐世保市立日宇小学校 石丸優美子



「雨にもまけず、風にもまけず」この詩を、子どもたちは、もう何十回唱えただろう。今年度はじめ、校長先生から宿題が出た。「来年の三月までにこの詩を暗唱しましょう。」子どもたちは必死になつて覚えた。早い子はあつという間に覚え、一人、また一人と合格者が生まれた。そんな中、なかなか覚えられない子どもがいた。彼は、何度も練習するのだが同じ所でひっかかり、かなり苦戦していた。周りの友達も、「聞いてあげるよ。」と協力するようになっていった。わたしも何度も聞いた。十二月になつて、「先生、校長室に行つてきます。」静かな闘志を漲らせ、彼は校長室に行った。「どうだった?」「だめでした。」不合格で帰ってきた。でも、彼はめげなかった。再び挑戦し、合格して帰ってきたのだ。私はうれしくなって彼の手をとり、跳び上がった。彼は、恥ずかしそうに何も言わずにその

場を去っていったが、帰り際、「先生、雨にもまけずに合格できてよかったです。」と一言ほそつとつぶやいて帰って行った。五年二組は、冬休みを前に「全員合格」を達成することができた。人前で話すのが苦手な子、覚えるのが苦手な子、色々な子どもがいるが、一つの目標に向かって取り組み、全員が達成できた。子どもの可能性は無限である。改めて再確認したのであった。

今年、教員になって七年目。四月から母校に赴任することになった。子どもの頃から憧れていた「先生」という立場で再び母校の地を踏むことができた。着任式で十六年ぶりに聴いた校歌に「初心を忘れず頑張れよ。」と背中を押された気分だった。「褒めるとは、ともに喜ぶこと。叱るとは、ともに悲しむこと。」初任の一年目からずっと心に持ち続けている言葉である。「子どもたちと同じ気持ちで分かち合い、子どもたちとともに伸びていく教師になりたい。」と誓った七年前、そして「将来は先生になりたい。」と純粋に夢見ていた十六年前を今改めて思い出す。「ともに喜び、ともに伸びていく。」そういう教師に私はなりたい。

楽しい学級経営を目指して

長崎市立桜馬場中学校 園田 喜美子



かけて語った。生徒たちは、その話を真剣に聞き、合言葉のように、いつも口に出して頑張ってくれる。毎年効果が出たと感じるのは、この学級開きである。

今年で教員十三年目。これまでの経験や先輩方から学んだことを生かし、毎年、「今までの中で一番の学級を作ること」を目標に学級経営に取り組んでいる。「学校は楽しい所」という学校経営方針をもとに、やはり生徒たちが学校を楽しいと思えるのは、「楽しい学級」でなくてはならないと考え、全員が「楽しい」と思える学級経営を目指してきた。

「楽しい学級」作りが一番大切なのは、「学級開き」だといわれている。学級開きの方法は様々であるが、担任の先生の学級に対する思いを熱く語ることがその年の学級の有り方を左右する。わたしは、今年、学級への思いを四つの誓いとして生徒に話をした。「燃えつつも」「思いやりのある」「うそをつかない」「元気のいい」クラスにしたいという思いを一時間

それ以外に良い効果が出たと実感したのは、「学級通信」の毎日の発行である。A四用紙一枚に、毎日の生徒の様子や伝えたいことなどを書くだけなので時間をかけずに作成できるものである。通信の中には、生徒の日常での良い面を名前を出してほめることをたくさん書く。そうすると生徒の活動もより活発になり、保護者との信頼関係も深まり、学級経営がスムーズになった。

そのほかに、毎日の交換日記・毎朝の黒板メッセージ・朝早く教室に入り生徒を迎えること・放課後の教室整備・班活動の工夫・行事に対する取り組みなど様々なことを行ってきた。どの取り組みも「楽しい学級」につながったと思う。

これからも、謙虚さを忘れず、生徒よりも元気で熱い心を持って日々の学級経営を磨いていきたいと思う。

優しさと厳しさを

佐世保市立早岐中学校 藤田 泰徳



国道を入ると桜並木が続く。平成十八年、桜が咲き誇る時期にこの道を初めて通った。あれからもう三年が経とうとしている。

一年目は右も左もわからなかった。学級でも授業でも苦悩と試行錯誤の日々。想像以上の様々な業務に追われながら過ごし、あつとつという間に終わっていった。二年目はもち上りの学年ということもあって、学級も授業も楽しんでやることができたが、ただがむしゃらに駆け抜けてきた。

一、二年目に担任した生徒とは九歳差で「先生と生徒」という関係に悩むことが多かった。そんな時に先輩から「年齢が近い分わかり合えることがあるんだし、それが武器なんだ」という言葉をかけてもらった。それから、お兄さん的な存在になってもいいから、まずは生徒と同じ目線をもとうと思

うようようになった。

授業では気になる話題から内容に入っていく。昨日のテレビだったり、好きな音楽だったり、話題は様々だが、生徒が興味を示すような話をする。そのために、お笑いのテレビを見たり、流行の音楽を聴いたりしている。休み時間には、プライベートな話をしたりふざけたりして遊んでいる。

ただ、同じ目線を持つとすればする分、厳しさがおろそかになるがちになってしまふ。ダメなのはダメと、毅然とした態度をとらなければならぬ。生徒理解と生徒指導を、どちらもしっかりとっていくことはとても難しい。

教育実践と銘打つほどのことをしているつもりはないが、わたしは生徒と同じ目線をもつことを心がけて今までやってきた。そしてこれからは生徒指導も同じように大切にしていきたい。生徒理解の上に立った生徒指導を目指すことで、優しさと厳しさを兼ね備えた、生徒にとって一生涯忘れられない恩師と呼ばれる先生に、わたしはなりたい。

母校だより

目録
編者

優れた教員の

養成を目指して

教育学部長 村田 義幸

平成二十年七月一日に国の教育振興基本計画が公表されました。

そこには、今後十年間を通じた教育の目標が示されています。また、長崎県教育振興基本計画も策定され、平成二十一年から五年間に重点的に取り組む事項として、①子どもたちの個性を生かし、能力を伸ばす教育の推進、②豊かな心と志をもってたくましく生きる力の育成、③子供の学びを支援する教育環境の整備、④学校や先生の教育活動を応援する学校サポートの充実、⑤子どもを育む家庭・地域の教育力の向上、⑥県民の学習活動を支援する生涯学習環境の整備、⑦潤いと活力あふれる文化・スポーツの振興の七つが挙げられています。

社会的に自立し、社会の一員と

して個性豊かに生きる基盤を育てるために、家庭、地域社会、そして学校と社会全体で協働して教育の向上に努めようというのです。

今年度から学部教育を教員養成に特化し、大学院教育学研究科の中に教職大学院の制度を活用して教職実践専攻(専門職学位課程)を創設した本学部の使命は、未来を担う子どもたちの教育に真摯に取り組む専門職としての教員を養成していくことであると考えます。

子どもたちが「たくましく生きる力」を形成するのを支援する教員には、社会人としての教養と教員としての専門性を備えることが求められます。本学部・大学院では、中央教育審議会が学士課程教育の改善に向けた審議の中で示した「学士力」に加えて、教員に求められる資質や能力の形成を目指して学部及び大学院の教育課程を編成し、授業を進めているところです。教員養成の実をあげるためには、大学だけでなく、県教育委

員会や各市町教育委員会、地域の人々と連携・協力していく必要があります。長崎県教育会、玉園同窓会の先生方からも多大なご支援をいただいています。今後とも、宜しくお願いいたします。

お世話になりました

今年度、学部では八名の教員が定年退職されます。位藤邦生先生(日本文学)、楠瀬正明先生(東洋史)、谷口雅子先生(社会科教育)の三名の先生には、二年間という短い期間ではありましたが、学部・大学院の窮地を救っていただき、また、学生の教育・研究にご尽力いただきました。糸山景大先生(技術科教育)、篠原駿一郎先生(哲学・倫理学)、中村嘉男先生(英語・英文学)、宮崎正明先生(発達心理学)、鷲尾忠司先生(代数学)は長期にわたり学生の指導ならびに学部・大学院の運営を担っていただき、今日の学部の礎を築いていただきました。

三名の先生が、年度途中で退職あるいは他大学に移動されました。鈴木理恵先生(日本教育史)は、広島大学に、中山雅雄先生(サッカー・コーチング、スポーツ心理学)は筑波大学に移られ、それぞ

れの大学で活躍しておられます。善岡宏先生(教育心理学)は、体調がすぐれず、今年度前期末に退職されました。これまでの各先生方のご尽力に対して心より感謝申し上げます。

耐震工事の進行

昨年は、教育学部南側の耐震工事が終了し、リフレッシュ・ルーム等を備えた安全で明るい建物に変身しましたが、今年度は学部北側(旧教養部側)の耐震工事が進行中です。工事期間中には、学生の皆さんには多大な迷惑をかけています。誠に申し訳なく思いますが、安全・安心な教育環境の整備のためであり、我慢をお願いしています。学生が気持ちよく教育・研究に取り組むことのできる教育・学習環境を整備していかなければなりません。が、工事が完了する平成二十一年三月には、物理的な面では大きく前進しますが、学生の読書離れや自習時間の少なさ等を考えると、図書の本整備や自習室の整備が不可欠のように思います。私たち教員の自己研鑽や協同の研修により、教職員が協働体制をさらに強めていく努力も人的環境の整備として取り組んでいきます。

イルカ・コウモリ・仲間たち

国際文化講座（国語）

教授 位藤 邦生



長崎大学には平成十九年五月に赴任しました。思いがけないご縁でしたが、二年ほどの間、充実した時を持たせていただきました。それまで三十年余も広島大学におりましたので、知らない方からは、広島と長崎、「平和学」をご専攻ですか、とも聞かれました。平和を希求する気持ちは人とかわらぬつもりですが、専門は、日本の古典文学です。主に中世の日記文学を勉強してきました。日本の女流日記文学の研究が、おおよそ大正末期に、ドイツ解釈学の影響を受けて始まったところ、そのジャンルの特徴として「自照性」が注目されました。英語の self-reflection

の訳語で、自分をとりまく外界とのかかわりから、自分の存在のありようを見つめ直すといった方法です。ただ、これは王朝の女流日記に限った特性ではなく、和歌にも随筆にも、あえて言えば、すぐれた文学作品に往々見られる性格であるというべきでしょう。コウモリは暗闇の中を飛ぶとき、一種の超音波を出して、自分の位置、飛んで行く方向等を探知すると聞きました。仲間と一緒に飛ぶときはその機能を一時止めることもできるとか。私たちの人生の涉りかたも、このコウモリやイルカの本能に似てはいないでしょうか。教室、講座、学部、大学、社会、日本、世界、また、家族、友達、知人、あるいは敵、味方、といったさまざまな「関係」の中で、私たちはなかなば無意識に「音波」を発生して、返ってくる音波を自分流のレーダーでとらえ、自分の位置を測定したり、位置の修正を行ったりしています。そして、こんな見方で中世の男性の日記を読むと、とりあげられた事柄が、一つ一つ、

記主とのかかわりから、「意味」をもつてあらわれてきます。新しい和歌研究や日記文学研究を、今は今まで以上に自由な立場で、進めてみたいと思っています。長崎大学の皆さま、ほんとうに有難うございました。

感謝

国際文化講座（社会）

教授 楠瀬 正明



一昨年五月、教育学部に赴任したとき、長崎大学のキャンパスに樹木が多いのに感激し、大学が中心街から移転する傾向のある昨今、よくぞ移転しなかったものだと感動しました。しかし感動もつかの間で、キャンパス内はいくつかの学部が校舎の修改築をおこなっており、教育学部もその一つで、赴任して二、

三ヶ月後には修改築のために研究室の移転の準備が始まり、私は急遽つくられたサークルセンターに移ることになりました。数年前にぎっくり腰をやっていたためか、前任校の退職、長崎大学への赴任、そして移転と続いたので、腰が痛いと訴えていました。そのことをついっつかり忘れ、その年の暮、積み上げていた段ボールの中の本を整理していて、ぎっくり腰を再発してしまいました。完全な寝正月となりましたが、年のせいかな、痛みがとれ、腰に違和感がなくなるまでに、一か月余りもかかりました。長崎大学在任中の忘れられない「痛い」思い出となりました。長崎が中国と関係の深いことは知っていましたが、いわゆる「長崎学」の奥深いには驚きました。中国の近代史を勉強していたものですから、長崎と中国の関係史を学びたいものだと思っていたのですが、残念ながら表面を学ぶのに精一杯でした。近世史の研究成果が濃厚なのに比べると、近代の長崎と中国との関係の研究はいま一

つという感じを受けます。長崎が果たした歴史的役割を考えれば当然のことかと思われませんが、二十世紀に長崎がさらに発展していくためには、近隣諸国・地域、とくに歴史的にゆかりの深い中国とさまざまな交流をおこなっていくことが必要かと思われしますので、近代から現代にかけての長崎と中国との関係史の研究が充実することを願っております。

二年足らずの短い間でしたが、まわりに良い先生と職員の方にくぐまれ、大いに助かりました。あつくお礼申し上げます。

在職期間を ふりかえって思うこと

国際文化講座(英語)

教授 中村 嘉男



四年間私学に勤めたあと、二十

九歳からずっと長崎大学にお世話になりましたが、教育学部にいたのはその在職期間の三分の一にも満たない間でした。しかしこの間に私が体験したことは、非常に大切なものだったと実感しています。

旧教養部に私がいた二十数年間は、いわゆる入口管理、出口管理に関わる必要は全くありませんでした。各学部で入学を認められた学生たちは、教養部では「教養」なるものに親しんだあと、各学部の専門教育を受けて卒業していったわけで、通過点のような教養部は、現実から離れて研究に没頭することに喜びを見出していた私にとつて、まさに理想の職場でした。

この状態は、しかし、教養部の解体によって終わりを迎え、私は教育学部に入れて頂いて様々な現実に向き合うことになりました。

これらの現実のいくつかは、入学志願者を増やす方策を考え出すためのワーキング・グループが今年度新たに作られたりして、年を追うごとに厳しさを増しているようです。

こういう状況の中で、次々に生じる問題にごく一部にすぎないけれど関わったことによって、自分が大切な体験をさせてもらったのだということを実感しています。

教育学部での体験がなければ、そして旧教養部のときのように一人で始めて終われる授業や研究だけ続けていたら、私は協力しながら苦勞して問題に対応することの大切さを、またそのときに支えあう関係への感謝を実感できなかったでしょう。

私は退職後、田舎で家庭菜園やバックパッキングなど楽しみながら過ごしたいと思っていますが、これら一人でできることに終始するだけでは不十分なのだと思います。

息子の家族と暮らすので、たとえば孫などが厳しい現実にいるいろ直面させてくれるかもしれません、まさにそのような直感が家族との、また地域社会との絆を作るということ、その絆をどのようなものにしていくかが問われてくるのだということなどを考えながら、教育学部で学んだこ

とが生かされるはずの余生を今から楽しみにしています。皆様、長い間、本当に有難うございました。

定年を迎えて

数理情報講座(数学)

教授 鷲尾 忠司



私は昭和四十五年五月一日付で、長崎大学教育学部に代数学担当の講師として赴任しまして、以来三十九年が経過しようとしております。学部の正面玄関前には高く伸びた樹木があります。この木の正式の名称はワシントン椰子というそうで最近になって知りました。私が赴任した当初は低木でした。私の研究室は本館2階、玄関の真上でしたので、窓を見ると、いつでも、岩屋山を背景にこの椰子の葉の茂みが見えていました。今では六階近くまで伸びて、長崎

大学で研究と教育に過ごした日々が、赴任してから約四十年間もの永きに亘っていることを実感しています。その間には、全く予期せぬことでしたが、本学部の附属幼稚園長を勤めさせて頂きました。実は昭和三十九年、大学三年生のときで、本学部はまだ学芸学部だったときでしたが、長崎大学を訪問したことがありました。そのとき大学の構内で幼い子ども達が遊んでいるのを見て、何か違和感を覚えて、それが印象に残りました。私の出身大学の構内では、子供を見かけたことがなかったからです。しかし三十年経って理由が分かりました。園長を務めていた時に附属幼稚園の創立百周年のお祝い会を催し、その折に幼稚園の変遷を調べて、昭和三十九年当時は幼稚園が本部キャンパスに設置されていたことを知り、「あのとき遊んでいた子ども達は附属幼稚園児だった」と驚きました。出合いとは本当に不思議なものです。学生時代を含めると四十七年間も大学で過し、好きな整数論の研究

究に携わる事ができ幸せだったと思います。教育学研究科は今年度から教職大学院として、充実拡大し素晴らしい展開を見せています。長崎大学と教育学部の益々の発展充実を念願いたしましたして退職のご挨拶と致します。

運命的であった、 技術教育との出会い

生活健康講座(技術)

教授 糸山 景大



赴任して間もない頃と記憶している。長崎市内の中学校で技術を担当しておられる三十代後半の先生が研究室にお見えになった。職業・家庭科から技術・家庭科に変わる中で、長崎県における中学校技術科のリーダー的な存在の先生であった。挨拶もそこに、学校現場での技術科の状況や問題点

を話されるうちに、「技術とは何か」「技術教育とは何か」に議論が移った。別れる前に、先生が私に「糸山先生。我々は教科専門の個々の領域について、そのことをちゃんと教える自信はある。しかし個々の領域と『技術』とがなかなか結びつかない。現場の教師はその解答が見出せなくて困っている。直ぐには言わないが、先生にその答えを出して欲しい」と言われた。この問いから十数年間、「技術とは何か」の答えを見つげるために、四苦八苦し、ようやく四十歳を目前にして、「システム論的技術論」を提起することができた。簡単に言えば、素材・材料とエネルギーが循環性を保ってモノを作り、使い、棄てる全プロセスを「技術」と呼ぶというのが、この論の骨子である。

この技術論に辿り着いたことが、私を環境問題、特にゴミ・廃棄物処理問題へ向かわせることになった。「素材・材料とエネルギーの循環」を実社会の中で確かめようと考え、一九九一年に長崎市が公

募していた「長崎伝習所」事業の中で、「リサイクル文化研究塾」なる塾活動を主宰し始め、一九九七年まで七年間、塾長として多くの市民の方々と一緒に、長崎市のゴミ・廃棄物処理問題やリサイクルの課題に取り組んできた。今も長崎市の秋のイベントとなつている「ばつてんリサイクル」も一九九二年に私が始めたものである。行政との付き合いも深くなり、「ゴミゼロながさき推進会議」活動も会議の創設から六年間、今年の六月まで議長を務め、長崎市・長崎県のゴミの減量に、少しはお役に立てたかと感じている。教育学部技術教育教室の一員となることがなかったら、決してこうはならなかったと思うと、私にとって技術教育という場所は、運命的ですらある。

一九七〇年四月に二十六歳で赴任し、足掛け三十九年間、大学人として過ごしてきた。この間多くの先輩や同僚、あるいは多くの学生・院生の支援や協力があつて、今の私があることは間違いない。

その意味でも、幸せな三十九年間
の大学人としての生活であった。
心から感謝申し上げる幸いです。

教育の現状を踏まえて

家庭・学校に期待するもの

人間発達講座(教育心理)

教授 宮崎 正明



昭和四十一年三月長崎大学学芸
学部を卒業後、対馬の鈴江小学校
に赴任したが、児童心理を理解し
た学級経営の重大さに気づき、三
年間務め、自己実現のため大学院
に進学した。広島大学大学院では、
発達心理学を学び、昭和五十二年
四月長崎大学教育学部に着任した。
大学では発達心理学の立場から、
教育・研究に没頭し、心理学に対
する学生のモチベーションを高め
た。大半は小学校の先生になって
いるが、大学院に進学し研究者に

なった者が数名いる。平成九年に
は附属養護学校の校長となり、
ノーマライゼーションの理念に基
づき、障害のある者もない者も、
共に生きるノーマルな社会を目指
し、保護者・職員と共に教育に専
念した。

子どもの状況認識をしてみると、
一億総ストレス時代の中、子ども
は疲れ、欲求不満や葛藤により不
安や緊張が生じ、情緒障害を引き
おこし、さまざまな問題行動を示
している者がいる。

子どもの自立・社会参加が教育
の目標である。そのためには、心
身のバランスを考えた発達支援が
大切である。身体や知性の発達は
促進されているが、情緒や社会性
の発達はそれに随伴していない。

二十一世紀は知恵の教育である。
知識は教えることはできるが、知
恵は教えることは出来ない。自ら
体験して獲得したものが知恵であ
る。タフな心と自己教育力の育成
が重要である。

現代のしつけは目標不明、規範
喪失が特徴だという。目標を欠い

たしつけの努力は無意味である。
礼儀作法、きまり、挨拶、言葉づ
かい、服装、身辺整理など、具体
的行動のしつけが必要である。

現代社会の問題行動は多様化、
集団化、広域化の展開を示してい
る。家庭、学校、地域社会のコー
ポレーション(協働)の精神に基
づいた子どもの健全育成が重要な
課題となる。

人生八十年、生涯学習社会の到
来である。生涯学習、生涯教育、
生涯労働、生涯余暇を可能にする
人生の組み替えが、生きがい追究
につながる。私の人生もこれから
生涯学習社会の中で、子どもの健
康的な精神発達を支援し続けて行
くことになるであろう。

篠原駿一郎先生及び谷口雅
子先生は、都合により寄稿頂
けませんでしたので、経歴の
み掲載いたします。

国際文化講座(社会)

教授 篠原駿一郎

昭和54年4月 東亜大学経営学部

助手

昭和58年10月 長崎大学教養部講

師

昭和61年1月 長崎大学教養部助

教授

平成5年6月 長崎大学教養部教

授

平成9年10月 長崎大学教育学部

教授

平成21年3月 長崎大学教育学部

定年退職

初等教育講座(社会)

教授 谷口 雅子

昭和49年4月 福岡教育大学教育

学部助手

昭和50年4月 福岡教育大学教育

学部講師

昭和52年1月 福岡教育大学教育

学部助教授

昭和60年10月 福岡教育大学教育

学部教授

平成19年5月 長崎大学教育学部

教授

平成21年3月 長崎大学教育学部

定年退職

おたつじやだより

「人生八十年」時代 到来

横浜市緑区中山町 松浦 隆譽
(昭和二十九年卒)



「敬老の日」にちなみ総務省が十四日発表した統計調査によると、九月十五日時点で「後期高齢者医療制度」の対象となる七五歳以上の人口は、前年比五三万人増の一三二一万人。総人口の一〇・三%を占め初めて一割を超えた。六五歳以上の高齢者労働人口は、四九五万人で就業率は、一九・四%より遥かに高い水準である。(労働人口は二〇〇六年調査)

折角両親から授かった掛け替えないこの大切な身体を十二分に發揮し人生八十悔いの無い生涯を終えたいものである。その為には先ず自己の健康管理に十二分に留意し、自分が行きたい場所(旅行・観劇・美術館・コンサート

ホール・各施設見学等)へ、人の手を煩わせずに自分の力で行き、食べたい物は自分の歯で食べ快適な生活を送りたいものである。寝たきりや入院して病院生活をしながら八十歳以上生きても何の意味もない。元気に生き生きと毎日を過ごすことこそ、生きていく意味がある。

それには、先ず転んで骨折しない。老化を防ぐ大豆サポニンを取る。抗酸化力を持つビタミンEやカロチンを多く含む濃い緑と黄色野菜を多く取り癌の発生を防ぐ。偏食をしないで三十品目以上の食物を取るよう努力する。

また、抗酸化作用の強い物質を摂取することは、癌をはじめとする生活習慣病の予防につながる。この作用を行うポリフェノールの一種であるフラボノイドは、レタスや春菊などの緑色野菜、玉ねぎ、大根などの白い野菜、大豆、緑茶、柑橘類の皮などに多く含まれている。

身体だけ強健でも、ボケ老人になつては仕方がない。自分で健康を考えた料理を作ることはボケ防止にもなる。要するに、心身共に健康で元気な老後を過ごせるよう努力することが大切である。現在喜寿を迎え心身共に頗る元気である。

人生の転機

福岡県前原市 松尾 秀則
(昭和五十年卒)



人にはそれぞれ転機があると思いますが、わたしの三つの転機について紹介します。

第一の転機は、中学校を卒業する時のことです。わたしは家が貧しかったので、「神戸にある親戚の中華料理店の見習い」か「親戚の理容師の見習い」になることになっていました。当時大阪に住んでいたおばさんが、「今からは、高校までは出とかんといかん。学費は出すけん、高校までやり」という一言によって、わたしは高校に進学することができました。一年生の三者面談では、担任の先生から「松尾よ、お前が小浜高校の就職の道を開いてくれ。」と言われました。わたしは勉強できるのはこれが最後と思ひ一生懸命勉強

し、三年生の夏休みには就職が決定していました。三学期になって、担任の先生から呼ばれて職員室に行くと、「教育関係の大学に行つたら、奨学金がもらえるから大学を受けてみらんか。」ということでした。おそらく高校の時も奨学金を受けていたので、担任の先生が手続きをしてくださったと思っています。もし、担任の先生が奨学金の手続きをしていなければ、大学へ進むことはありませんでした。そして無事長崎大学に合格し、入学することができました。これが第二の転機です。

大学を卒業し、就職試験を受けるようになり福岡と神戸の試験を受けました。神戸の試験を受けに行った時は、先輩の所に泊めてもらい、一週間ぐらいお世話になり長崎に帰ってきました。すると、茶色の封書がアパートに届いていて、福岡県教職員の面接の案内状でした。それが次の日でした。すぐに準備をし、福岡にきて面接を受けました。もし、もう一日神戸にいたら、今の職には就けませんでした。これが第三の転機です。これからもまだまだたくさん転機があると思いますが、一つ一つ乗り越えていきたいと考えています。

プラスの学校生活

南島原市口之津町 松尾ヒサヨ
(昭和四十三年卒)



空はるか 雲仙の嶺
有明の海 風光る
ドルメンにまた城跡に……

作詞/作曲、さだまさしの有馬小学校校歌『空はるか』。町内四つの小学校が統合して有馬小学校が開校して、五年目を迎えている。「有馬小学校の校歌は、さだまさし作詞/作曲だつて！」

当時話題になった『空はるか』の校歌を歌うことがあるうなんて思ってもいなかったわたしが歌っている。

三十八年間の教職生活を終え、南島原校長会の歓迎会に退職校長会の代表として出席の折、何かお手伝いできることがあれば、声をかけてほしいと挨拶で述べた。

三十八年間教職生活を続けることができたのは、周りの人たちの支えがあり、自分が健康であったからこそと感謝の気持ちを込めて挨拶を述べ、第二の人生を出発した。「何かお手伝いを」に返事をく

ださったのは、有馬小学校と龍石小学校だった。有馬小学校はボランティアとして授業のお手伝いを、龍石小学校は朝の読み聞かせをとお話があった。両校の校長先生に調整していただき、五月の連休明けから、プラスの学校が始まった。

二年目からは、南島原市でも学校支援員制度が導入され、両校の学校支援員として辞令をもらい、担任の補佐として授業に関わらせてもらっている。

元校長という肩書きが気になる教職員もおられたようだが、三年目の現在では、違和感なく接してもらっている。

朝の読み聞かせの本の選択に頭を悩ますこともあるが、一週間に一回は図書館に行き、子どもたちの顔を思い浮かべ、「あの子が好きだな本、この子が興味を示す本」と選んでいくのも心がなごむ、楽しい生活リズムになつている。

担任の補佐としての授業前の打ち合わせの中で、自分の授業についての思いも述べさせてもらっている。授業後の反省、引き継ぎ等の学校生活を終え、午後からは、読み聞かせお話し会の創作活動の時間に充てている。教育界外の人たちのおつきあいでも人間関係の輪がさらに大きくなった。

プラスの学校生活を営むことができるのは、校長先生をはじめとする教職員、地域の皆様の理解と自分の健康があればこそと、退職時の感謝の気持ちを今も抱き続けている。

社会人になって思うこと

長崎市京泊 鰐口 美咲
(情報文化教育課程 平成二十年卒)



たまごの同窓会会員のみなさまこんにちは。わたしは、昨年三月に、教育学部、情報文化教育課程を卒業し、現在は地元長崎で銀行員として仕事をしております。

四月に入行してから、九ヶ月、あっという間に過ぎたように思います。大学時代の四年間、自由で気ままな生活を楽しみ過ぎたせいなのか、入行してすぐは、規則正しい生活に慣れるのが大変でした。また、これまで学んだ知識とは全く関わりのない金融業界に入り、初めは本当にわからないことばかりで、戸惑いの毎日でした。先輩に教わりながら一つ一つ覚えていき、二、三ヶ月程で、なんとか一人で窓口を担当できるようになりました。

といいまして、失敗も多々あり職場の皆様にはご迷惑をおかけすることばかりです……。

そんな中で、わたしの楽しみはやはり休日です。休日は学生時代からの親しい友人たちと飲みに行ったり、買い物や映画、日帰り温泉へ出かけたりなど、なにかと集まる機会を持つようにしています。時には仕事の愚痴を言い合ったり、励まし合ったり、社会人になって改めてこのような友人がいることをありがたく感じております。

また、社会人になって最近思うことは、いかにこれまで自分が周りの人々に支えられて生きてきたかということ。両親や友人、先生方、これまでわたしが関わってきた人々への感謝の気持ちでいっぱいです。

これからは私がおのれたちへ少しでも恩返しができるよう、日々の仕事や生活を充実させていきたいと思えます。そして、素敵な一社会人となるため、自分を向上させるための目標を常に持って、何事にも精一杯取り組んで行きたいと思えます。

最後になりましたが、今回、このような執筆の機会を与えて下さり、ありがとうございます。たまごの同窓会会員の皆様の今後ますますのご活躍とご健勝をお祈りし、わたしの近況報告を締めくくらせていただきたいと思います。

青春に乾杯

四十八年ぶりの乾杯

藤尾 茂春

(昭和三十五年学芸中数卒)

「オー オー オー」何ともしや言葉にならない声と握手もその交歓は始まった。時は平成二十年十一月十五日、所はセントヒル長崎。卒業以来四十八年ぶりの同窓会という形での出合い。長崎大学学芸学部昭和三十五年卒業の数学科の仲間である。

現役時代は、小中高それぞれで場子どもたちの将来に夢を託しながら、お互いに職責を全うしてきたものである。その間、大小の出会いはあったものの、このような形での会は皆無であった。個人的な賀状挨拶などの中では、同窓会をやりたいなあとの声は出たものの、実現できないままであった。振り返ってみると卒業以来半世紀近くも過ぎ、いつの間にかそれぞれが古稀も無事乗り切っていた。内気なわたしは、迷いながらも「もう延ばせない」と密かに準備を始めたのが、二月の頃である。まず、退職後ばやけていた仲間の所在確認のための電話連絡から始めてみると、「待っていたよ」との喜びの声が聞け励みになった。

まとめてみると、長崎十、佐世保二、島原一、諫早二、大村一の計十六人で、全員が県内在住しかも欠員なし。皆が健在だったことで、不安な心を大いに勇気付け



れたものである。六月に予告案内、八月に正式案内を発送。十月末での吉報が十通となり、「四、五人でも集まればいいや」との当初の心配が嘘のようであった。また当日やむを得ず参加できなかった仲間からのメッセージもあり皆の心は大きく一つになった。かくして、この第一回目の同窓会が実現出来たのである。学生時代から今日までの長い年月が一気に縮まり、話に花が咲き明るい笑顔がお互いまぶしく見えた。話の中で「健康には注意しよう」と言う声が出るたび、お互い身に沁みるものがあつた。

さらに、九十歳にしてなおご健康で、午前は読書、午後は散歩などと明るく前向きに過ごしておられる恩師の近況など紹介し、皆に喜んでもらったことも、心に残ったことの一つである。誰いうともなく、三年後という再会の約束も出来、皆満足気な笑顔で帰途についた。今日の欠席者も含め、次回を心待ちにしながら毎日を健康で明るく過ごしたいものである。

還暦同窓会でリフレッシュ

寺側 喜國

(昭和四十三年卒)

大学を卒業してから早くも四十年目を迎え、教職を定年退職して三年目を過ごしております。

卒業以来近隣の同窓生とは何度も会う機会をつくってきています。が、平成十年に小学校課程生七十名全員の近況を知らせ合ってお互いの動向を知ることができました。それを契機に同窓会開催を呼びかけて、平成十二年に三十年ぶりに集うことができました。その折に五年後の還暦という節目の年に再会しようとして申し合せていました。そして、三年前の平成十七年八月二十日に、還暦祝いを兼ねた同窓会を実施することができました。当日は、県内はもとより九州・関西・関東の各地から二十四名の仲間が参加しました。

会場では、お互いに昔の面影を確かめ合うとすぐに四十年前にタイムスリップし、大学在学中の思



い出話に始まって、現在の状況や思いなどについて話が弾みました。既に定年退職や子育てを卒業された方はその足跡をふり返り、さらにはまだまだ挑戦したい将来の夢について熱っぽく話していました。これから六十歳を迎える方は、有終の美を語るべく仕事や子育てへの一層の思いを語っていただきました。いづれの方からも、これまで職場や家庭の中でそれぞれに築き上げてこられた生き方に深く感銘を受け、これからの人生を豊かに過ごす上での示唆をたくさんいただくことができました。

今後機会をつくって同窓の仲間と近況を語り合い親交を重ねることによって、心身共に健全に過ごすエネルギーとしていきたいと思っております。

地区懇話会

積もる雪・積もる話

佐々町立佐々小学校
村川 賢太郎



平戸・松浦・北松の三地区による合同懇話会は、この冬一番の寒波に見舞われた一月二十四日に開催された。

予報では、積雪の恐れありとのこと。しかし、天候の心配よりも先輩諸氏との同席に緊張を覚えながら会場に赴いたが、自己紹介、会長先生や大学の先生方のお話、そして、現職の先生方の発表と懇話会が進んでいくにつれ、会の盛り上がりとともに、私の緊張も会員の一人として懇話できる楽しさ

に変わっていった。
大学・OB・現職といろいろな立場からの話に花を咲かせ、実践発表を肴に酒を酌み交わし、玉園」という名の絆で結ばれた参加

者は、懇話会後の懇親会においても、その絆をさらに強いものにするのができた。
会報などで、その存在は知っていたものの、これまでは機会が少なく不安を感じながらの参加であったが、年齢の違いを超えて、立場の違いを超えて集うこの会に参加することができた充実感と、会間に降り積もった雪の中、帰途に着くことの大変さを、一緒に味わうことのできたよき日となった。



玉園同窓会
平戸松浦北松地区合同懇話会

一事二務一局より 動いています同窓会

本年度も、「会員の親睦を図り、併せて教育の振興に寄与する」ことを目的に、年度当初の計画にしたがい諸事業を展開してきました。「動いています同窓会」の取り組みの状況について、報告いたします。会員の皆様の御協力に感謝いたします。

教育・研修部

第一回教育・研修部会を四月八日に実施しました。大学から三上教授、事務局から宮地会長・小川事務局長が出席し、二十年度の教育学部の学生(準会員)に対する、就職支援事業について内容や活動計画及び日程等について話し合いました。

その計画にしたがい、五月十四日から八月二十一日まで、教職教養や一般教養、集団討論等、受験対策について支援活動を行いました。次に八月二十二日から九月五日まで、二次試験対策として、面接の受け方や小論文の書き方・模擬授業等について支援活動を行いました。

第二回教育・研修部会を、十月十七日に行い、二十年度の反省と二十一年度のセミナーの持ち方について話し合いました。

今年度は、卒業生の三割に当たる七十名が合格し、そのうちの二十名が県内の合格という好成績を収めることができました。

広報部

第一回広報部会を、五月八日に開きました。山崎・松本・大隈・中島・渡辺の各広報部員、事務局から

宮地会長・小川事務局長・担当の尾崎が出席し、二十年度の会報「たまぞの」の編集方針及び作成計画、会報「たまぞの」(百二十一号)の編集計画や作業日程について話し合いました。

九月四日広報部員による一次校正を行い、九月五日に、全会員宛、発送いたしました。

十月十六日、第二回広報部会を開きました。会報「たまぞの」(百二十二号)の作成日程、内容構成、主題、そして執筆者について検討しました。

それを受けて、執筆者の選定、原稿執筆依頼をお願いし、一月二十二日に広報部員による一次校正を行い、二次校正と作業を重ね、二月二十二日、百二十二号の発行に至りました。

関係の支部長さんをはじめ、執筆いただきました会員の皆様には、心から御礼を申し上げます。ありがとうございました。

総務部会

五月十九日、第一回総務部会を開きました。総務部から、平山・小西・岡田・木村の各部員、事務局からは、宮地会長・小川事務局長・担当の野中が出席して行いました。

主な内容は、六月二十九日(日)に開催される、理事会及び評議員会の持ち方に関する事項です。主な内容は、①昨年度の事業報告、それに伴う決算報告及び監査報告 ②本年度の玉園同窓会の会員の動向、事業内容とそれに伴う予算等 ③公益法人等について、審議しました。

これを受けて、理事会・評議員会を開催しておりますので、詳細については、会報「たまぞの」(百二十一号)を御覧ください。